

[81] H・アール・カオス

身体の絶叫と甘美な緊迫

2005年9月11日 毎日新聞 mai

《何が起こりそうだ……、何だろう?》

H・アール・カオスの舞台には、そう思っただけで背中がぞくぞくする瞬間が必ずある。

そういう時、舞台のシンプルな装置が、ふしぎな幻想に彩られて見えるのだ。たとえば神秘の森に迷い込んだような、あるいは秘密の廊下をたどっているような、さもなくば神話のもやに包まれた秘境に置き去りにされたような……。抑えようもなく沸き起こるスリリングな予感の中身は作品によって違うのだが、魂が凍りつくような、それでいて神秘的な緊迫感は共通している。

その仕掛け人が、H・アール・カオスの主催者にして演出振付をしている大島早紀子である。この人の手腕たるやじつに見事で、進行の間合いといい、照明の効果といい、かすかな身のこなしといい、寸分のぬかりもなく組み立てるのだけれど、それをまったく感じさせない。まるで巧妙な手品師である。

しかもH・アール・カオスの舞台では、その《何か》は確実に起こる。花火が炸裂するように起きるのである。

炸裂する最大のものは、H・アール・カオスのスターダンサー、白川直子の身体だ。服をかなぐり捨て、細身の体の骨も折れよとばかりに身をしながらせて踊る。踊るといふことばでは言い表せないほどの、それは絶叫のような何かである。文字どおり、なりふり構わずといったふうに動くのに、いささかの破壊もなく、言いようもなく美しい。かなりダンスを見慣れている、毎回、何なのこれは……、と見入ってしまう。

[81] H・アール・カオス

身体の絶叫と甘美な緊迫

2005年9月11日 毎日新聞 mai

その両性具有的な身体で白川は『ロミオとジュリエット』の男女の主役を一人で演じた。『春の祭典』では、浴槽に身を浸して濡らした髪の毛でシャワーのように舞台を水浸しにした。

ダンスの感動というのは、とかく目の前のダンサーその人にフォーカスを絞りがちなので、H・アール・カオスのことを語るときにはつい白川直子を前面に出してしまうのだが、しかし隠れたところにいてすべてを操っている魔術師も劣らずすごい。いや、このふたりの組み合わせがすごいと言わなければならない。

ダンサーをワイヤーで宙吊りにしたり、吊られたままコマのように回してみたり、かなりケレンな手法で観客を圧倒する大島だが、その作品は社会的なテーマを内包している。記憶に鮮明なところから言えば、『神々を創る機械』が扱っていたのは臓器移植だったし、『ドリー』はクローンだった。

しかし、それらどの作品も、まったく社会問題を意識せずに見ることができない。というより、ゾクゾクと神秘的予感におののき、息もつけぬほどの炸裂に立ち会って、幻のように美しい終演に陶然として劇場を後にしたその翌日あたり、そうか、あれはそういうことを言っていたのか、と腑に落ちたりするのである。

舞台上に登場するのは白川直子と数人のグループ。全員が女性である。グループの役回りは作品によって違うが、たいていは酷薄ないじめ役だ。いじめられて身体で絶叫する白川を見ていると、社会の中で生きていくこと、集団の中で個を貫くことは、すご

[81] H・アール・カオス

身体の絶叫と甘美な緊迫

2005年9月11日 毎日新聞 mai

く怖いことなんだと、しみじみ思う。

なぜ女性ばかりなんだろうと考えたこともあった。とくにグルーブが男装してスーツを着込んでいたりすると、これが男性ダンサーだったらどうなるかと思ってしまう。

たぶん男性でも、作品は立派に成立するだろう。しかしあの怖さは出せないのではないだろうか。そしてあのなまめかしさも。

現代では女性が強くなったけれど、だからハッピーというような単純なものではない。女どうしの確執も強くなった。女だから感じる女の憎らしさ、畏怖、そして何より美しさもある。そういう情感が渦を巻いて、微妙な通底音を響かせているのがH・アール・カオスの舞台である。

数年前まで、白川直子だけがダントツの上手きだったが、最近是指導が行き届いてか、驚くほどグルーブが腕を上げた。白川が何人も、といった感じさえある。白川直子という希有なダンサーが、この先どのようなナマの若さを乗り越え、芳醇な熟成を見せていくのか、それを私は期待をもって見守っている。

それはまた魔術師、大島早紀子の正念場でもあるはずだ。